反転

北畑光男

1

津波の舌が盛りあがり
のびてくる
ぼくのこころのなかで
不安は繊毛のように波打つ
街は
海の舌に呑みこまれる
口は
とじたりひらいたり
壊れた街が吐き出されている
盛りあがり街の奥に入ってくるのは
津波の舌か
じざいにかたちの変わる　のない
幽霊の舌か
のびていくのは
前ばかりではない
横へでもななめでも
恐怖をつれて
弱っている方へのびていく

2

その日ぼくは
息を殺して
テレビに見入っていた
おしよせてくる
津波は
舌を
陸地へのばし
枯れた田んぼに
音をひそませて入っていく
避けた舌の津波は

でとまり
横へ裂けてのびていく
自動車が逃げていく
ちがうチャンネルに切り替えるや
壊れた家が
崩れて流れている
自動車はぷかぷか浮かび
右に左に流されている
呑みこなれた自動車や家は
プランクトンであるか
悲鳴を
消化したのは津波であるか
死と破壊を好む津波の口であるか
みなさんすぐに逃げてください
逃げて
の声を呑みこみ
屋根に逃げたひとをも
屋根ごと呑みこみ
高い空からみていた電波の世界は
大きく反転し
ぼくを
テレビから放すのだ
そしてぼくは思い知らされるのだ
津波舌は
遠く離れた親戚の家を壊した
積み重ねた家族の思いをもろとも壊した

3

生い茂った草叢から
飛び立つ小鳥をじっと見ている
毛の無い猫

お地蔵さまに耳をあてると
読経の声がかすかに聴こえてくるのである